

---

# L i f e

七海弥宏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Life

### 【Zコード】

Z0738BA

### 【作者名】

七海弥宏

### 【あらすじ】

人間（？）とエルフの運び屋夫婦のお仕事な旅路と日常風景。シリアル、コメディ、ほのぼの予定。異世界ファンタジーです。

## 変人とシンテレ

「まだかかりそつか？刀祈」  
「とき

「ううん、砂が問題なんだよ、これは。砂を遮断しないことには  
どうしようもないね。風で飛ばして、コーティングしたらイケるか  
な……どう思つ? セレファース」

「そうだな。イケるんじゃないかな? ……ココが砂漠じゃなかつたら  
な」

「ははは……」

橘 刀祈は乾いた笑い声を上げながら、工具片手にそのまま後ろに  
倒れ込んだ。ここら一帯はパウダースノーならぬパウダーサンドの  
砂漠なので、地面は柔らかく刀祈の体を受け止めてくれる。しかし、  
そのパウダーサンドのせいで、刀祈自慢のお宝、自動四輪車（レア  
物）が動かなくなってしまったのだ 砂漠のど真ん中で。

「やはつさつきの街でサンドホースを借りるべきだったな」

「ううー…」

澄み渡った青空を背景に、逆さに見える背の高い伴侶が苦笑する。

風に弄ばれているプラチナブロンドの長い髪が、冬の脆弱な口差しにきらきらと輝いて美しい。身にまとっている物は刀剣と変わらないほど質素で、長旅で大分くたびれているのに、彼女が着ていると、うだうだビンテージ物に見えるから不思議だ。

「サンドホースに乗るのはちょっと遠慮したかったんだよ～」

「乗れなかつたのか？」

「僕は君と違つて都会のもやしつ子としてすくすくと育つた貧弱青年だよ？ サンドホースに取り付けられた硬い鞍とか、長時間の振動の中での移動とか、絶つ対つ無理つ！」

「威張ることか？」

「威張つてない。」これは単なる事実で、それをふまえた主張だよ、セレス

「つ……外で略称を呼ぶなつ」

「慣れないなあ」

「言つただろう。私の種族『リーフ・エルフ』の一族の捷で、名前を略して呼んでいいのは伴侶だけだと…」

「僕は君の伴侶だから問題ないだろ？」

「……そ、れはつ……そつ、だが……」

「……君は本当に可愛いなあ……」

「つーーー！からかつたな？！」

「本気さ！失礼だな」

「東の人種『イースト』は奥ゆかしいと聞いたが、嘘なのか？！」

「何事にも例外というものが存在するものだよ。個体差とかね」

「……とにかくーーーこれからどうするんだ？！遊んでないで修理しろー！」

怒りばかりではなく真っ赤になつたセレファスは、エルフとは思えないほどの乱暴な足取りで刀祈から離れると、自動四輪車の後ろに周り、積み込んでいる荷物を漁つた。冬の砂漠で野宿出来る準備があつたかチェックしているのだろう。時折自動四輪車の車体が大きく揺れている。

どのみち車が直つたとしても、今時分から走つて陽がある内に砂漠を越えるのは不可能だ。だつたら今いるこの場にとどまり、冬の砂漠の凍てつくような夜に備えて早めに準備した方が良いとセレファスは考えたらしい。あらかた荷物チェックが済んだ後はおもむろに自動四輪車の屋根に上り、辺りを警戒する　実に分かりやすい”照れ隠し”である。

「……セレファスー？」

「五月蠅いー早く修理しろー。」

そっぽを向いたまま怒鳴ることで、”私はまだ怒ってるんだ！”と全身でアピールするセレフアスが可愛すぎて、刀祈の腹の中で笑い虫が暴れまくつたがどうにか耐えた。そして、「可愛いなー、僕の奥さんは」と、溢れた愛しさを小さく……本当に小さく呟いたのが、身体能力が馬鹿みたいに高いエルフには聞こえてしまい、「黙つてやれー！」とまた怒鳴られた。

まあもつとも、奥さんに怒鳴られるのはいつものことなので、刀祈はまつたく気にしないのだが。

「はいはい。じゃあ直すとしますか」

「……出来るのか？風で飛ばしてコーティングだろ？」

「さすがにそれは無理だから、主要動力部に遮断魔法かける

「そんなこと出来るのか？」

「僕にはね」

「……『イースト』は何やらかすか分からぬってのは本当だな

「君、プロポーズした時もそう言つてなかつた？」

「ひーかわせとやれー。」

屋根からフロント部分を覗き込んでいたセレファスは、またもやそつぽを向いた。『リーフ・エルフ』に多いといつ“薬師”と“狩人”の証たる耳飾りを着けている尖った耳が赤い。

僕の奥さんは世界一可愛いと、ニヤけた顔を隠さず存分にニヤニヤしながら、刀祈は主要動力部に魔法をかけた。

「我望むはパウダーサンドの遮断！主要動力部を守つてヨロシクうつ！」

かざした刀祈の手から飛び出した青白く淡い光が主要動力部分を覆うように走り、動力部を全て覆うと、宙に吸い込まれるように消えていった。一番簡単な遮断魔法の完成だが、それと同時に屋根から深い溜息が降つてくる。チラリと視線だけで見上げれば、セレファスが屈んで頭を抱えていた。

「なに？どうかした？」

「相変わらずなんてデタラメな呪文スペルなんだ、お前の魔法は」

「要は、使いたい魔法の効果の想像力と、言の葉に乗せる魔力だろう？呪文の文句は想像を高めるための鍵でしかないんだから、なんでもいいじゃないか。どの魔法を使いたいかとか、範囲はちゃんと入れてるんだから」

「”ヨロシクうつ！”は必要か？」

「ただのノリだよ…… や、行こうか。もつひとつに行つたら水場に着くはすだから、今日はそこで休もう」

「……ああ、そうだな。どういつ言つたところで栓のない話だつた「そこまで気にすることじゃないだろー。僕は滅多に魔法なんて使わないんだし」

「そういう問題じゃない」

「お前の呪文は力が抜ける」と苦笑しながら屋根から助手席に移動するセレファスを横目に、「そんなにヒドイかなー」とぼやきながら運転席に座つた刀祈は、キーを回してエンジンを起しそと、アクセルを踏んでゆっくりと発進した。

青く澄んでいた空はいつの間にか黄身がかつた色に変わつており、あといぐらもしない内に赤く焼けてくるだろう。地平線に太陽が隠れてしまつ前に水場にはたどり着きたいところだが、どうやらそうもないかないようだ。

「……何かの群か?」

前方の砂煙に気付いたセレファスの問いかけに、今度は刀祈が溜息を吐いて答えた。

「砂漠の民だねえ」

「盗賊か」

「やうとも言ひ」

”群”とセレファスが表したように、結構な数のサンドホースに跨つた盗賊と砂煙が真っ直ぐこちらに向かってくる。

「あー、完璧僕ら狙いだね。しょうがないな……セレス！しつかり捕まつて！」

「略称で呼ぶなど言ひのひつて！」

勢いよくハンドルを切つて進路を北から東に変えると、刀祈は思い切りアクセルを踏み込んだ。

「いっけえーーっ！」

ぐんっとスピードを上げる自動四輪車に、矢の雨が降り注ぐ。ハンドルを左右に切つて直撃は免れるが、何本かは屋根に突き刺さった。

「魔法かけてない？！どんだけ丈夫な鎧なんだよつ」

「泣くなよ」

「「」の間外装変えたばつかりだつたのにっ！いぐらかかつたと思つてるんだっ！」

「いぐらかかつたんだ？」

「……あ

「後で詳しく述べうか」

「あははは…………はあ…………」

自動四輪車とサンドホースの追いかけつ「」は、夕焼けを背景にしばらくの間続いた。

刀祈の出身国である『陽昇る暁をいただく始まりの国（通称・アカツキ又は陽昇国）』のように、道が舗装されていたら、サンドホースに遅れを取ることは絶対にないのだが、ここは砂漠で、舗装されているどころか道すらない。

あるのはさらさらのパウダーサンドのみで、自動四輪車のよつな重い乗り物との相性は最悪だ。

何度もかの攻撃の折、「」のままでは埒が明かないと、一人の盗賊がタイヤを射抜いた……途端、バランスを崩した車をなんとか立て直そうと、刀祈は忙しくハンドルを切りさばく。車はやや減速しつつも蛇行しながらなんとか前へ前へと進んで行つたが、その先に大きく口を開けていた流砂に足を取られ、そのままズルズルとその中へ滑り落ちてしまった。

「刀祈！車から降りるぞー！」

「大丈夫。」そのまま中に行こいっ」

「正氣か？！」

「大丈夫だから。僕を信じて」

「……」

刀祈の言葉にセレファスが一瞬で覚悟を決めておとなしく助手席に座り直すのを見届けてから、正面に視線を戻すと、フロントガラスの向こうのフロント部分は、もう半分ほどパウダーサンドに埋まってしまっていた。しかし、その部分をよくよく見てみると、淡く輝く青白い光が、パウダーサンドを押しのけているのが分かる。先ほどの遮断魔法が持続しているのだ。

「我望むはパウダーサンドの遮断！我、橘刀祈と、我が最愛の伴侶、セレファス・セレスタイトを守りし膜となれつ！風よ！遮断結界の内に吹きて、命を繋ぐ息吹となれつ！」

続け様に呪文を唱え、二つの魔法を同時に発動させると、淡い光が車内に溢れる。青白い光は主要動力部にも施した遮断魔法。そしてもう一つの春の日差しのような淡い黄色の光は風の魔法だ。パウダーサンドを遮断し、風を送って空気を確保することで、パウダーサンドの中を移動出来るのみにしたのである。

「アカツキ人は皆こんなにもデタラメな魔法を使つてゐるのか？」

周囲の盗賊を気にしながらも、セレファースは呆れたように言つた。  
盗賊たちは流砂に巻き込まれない場所で刀祈たちが車から降りるの  
を待つてゐたが、降りる気配がないのを見て浮き足立つてゐる。  
車の三分の一はすでに砂の中。窓といつ窓がミシミシと嫌な音を立  
てた。

「そんなに変かな？」

「呪文を一つ一つ唱えるのではなく、二つ合わせたような呪文一つ  
で二つの魔法を発動させるのが変でなくてなんだ？」

「合理的？」

「……なるほど。覚えておいで」

ふふっと笑つたセレファースの微笑みにほのぼのと幸せを感じている  
と、ついに砂の圧力に耐えかねた窓ガラスが割れた。車内が砂でい  
っぱいになる前に、セレファースの膝に置かれている彼女の手を取り、  
本当に大丈夫かと問い合わせるブルーグリーンの瞳に笑みを返す。

「何も心配ない。ここは入口だから」

「……入口？」

「や。ちょっと遠いかもだけど」

喋れたのはそこまでだった。

遮断と風の魔法で呼吸は確保されたが、視界は真っ暗に闇ざされる。まるで、暗闇に独り閉じこめられたように感じる中、繋いだ手のぬくもりだけがお互いの存在を主張していた。

ランプの光に照らし出される壁画にはロマンがある　ついでに歴史も。

そうラグアが言つと、歴史がついでかよ、と、古い友人はアカツキ人特有の黒に近い紫紺の瞳を細めて笑つていた。

あれはいつのことだつただのう　もう随分と彼には会つていない。

「ラグアさん、ドコですかー？」

千年王國全盛期に描かれたと思われる壁画をしみじみと眺めながら、友と、その友との冒険の数々を懐かしく思い出していたラグアを呼ぶ声が洞穴内に響き渡る。

のんびりとした性格がよく現れているこの声は、最近ラグアに弟子入りした『ホビット』族のナナイだらう。ランプの光に照らし出された腕時計を見やれば、そろそろ昼飯時だ。弁当を届けに来てくれたに違いない。

「おーい、ちび助ー。こっちだー」

呼びかけが遠くに行きかけたので、場所を示すために声を上げる。それからしばし間があつて、ラグアが数時間前にこの場所に潜り込

んだ入口から、ランプの光と共にひょっこりとナナイが顔を覗かせた。

「ボクはちび助じゃありませんよ、ラグアさん。これでも『ホビット』の中では大きい方なんですからね」

「歯を尖らせて文句言つような奴は”ちび助”で十分だろ」

「なんですかもーっ。お皿いらなくんですかつ」

「いのよーいのーオレの弁当つ」

持ってきたバスケット（弁当）”と帰ろうとするナナイを引き留め、なんとか宥めてバスケットを受け取り、ホツとする。

壁画や天井画、発掘品に隠された歴史を読み解いている間は忘れる空腹感が、ナナイの声と、時計で確認した時間を見て一気に押し寄せたつまりラグアは今、とても腹がへっているのだ。

バスケットの中からは、ナナイ特製のベーグルサンドとフルーツケーキ、それから、お茶を飲むための茶器一式が出てきた。

『ホビット』であるナナイと、『ドワーフ』であるラグア。世界の成り立ちやこれまでの歩み、姿を消したとされる神人類の謎などが刻まれた遺跡や壁画などを調査し、それらを解き明かすことに興味を持っている というのがこの一人の最大の共通点だが、それともう一つ、二人の距離を近付けた共通点がある それは”食事”だ。

生来牧歌的な暮らしが好む『ホビット』と、鍛冶の技術や鉱石の知識を持ちつつも、荒々しく粗野な性格から他の人種から敬遠されがちな『ドワーフ』は、食べることに関しては手間暇を惜しまない。それ故に、出先にまで茶器一式を持ち出すのは彼らにとって”普通のこと”であり、出先だからといって生ぬるいお茶ですますのは言語道断、ありえないことだった。

ちゃつかり自分の分のベーグルサンドとフルーツケーキ、ティーカップを持ってきたナナイは、そそくさと茶を煎るために湯を沸かす。貴重な遺跡で火をおこすのは躊躇われるので、用意されたのはあんじやく温石だつた。

温石とは、魔法を吸い取ることが出来る『吸引石』に火系の魔法を吸わせた石で、手の平サイズ四つほどあればたいていの料理が煮炊き出来る、この世で最も簡易な魔法具だ。ちなみに、『吸引石』に水系か氷系の魔法を吸わせた石は冷石といい、生肉や野菜を冷やし、長く保存するために使われている。

「ナナイ」

「なんですか、ラグアさん」

「お前は歴史ロマンを求めて、世界を旅しようとは思わないのか?」

「はい?……なんですか、藪から棒に」

「いや、なに。さつきふと、昔のことを思い出してな。オレは今の住居に落ち着くまで、友と旅をしてたんだよ」

「それはなんというか……見上げたご友人ですね。最近弟子になつ

たばかりの穏和でのんびり屋な『ホビット』のボクでも、ラグアさんの言葉に何回キレそうになつたか分からぬのに

「おー！それは言い過ぎじゃないか？！」

「はい、どうぞ。今日は寒かつたですから、しじうが入りの紅茶にしてみましたよ。お砂糖は一つでいいですか？」

ラグアの突っ込みを華麗にスルーして、にこにことティーカップを差し出すナナイ。柔らかく湯気を立ち上らせる紅茶とその笑顔の前に何も言えなくなり、ラグアはもじやもじや髪の中に隠れた口を真一文字に引き結んだ。

前述の通り、牧歌的な暮らしを好む『ホビット』は、生まれ親しんだ土地を離れることは滅多にない。自給自足の生活をしている彼らは、汗水を垂らして田畠を耕し、苗を植え、仲間と苦楽を共にしながら世話をし、自然の恵みに感謝しながら収穫する。それらを美味しい料理にし、食事の時間を最大限に楽しむ それが一般的な『ホビット』のライフスタイルだ。

そんな彼らには、長旅をする時間的余裕も、田畠を放つてまで旅に出る必要もまったくない つまりナナイのように、この世界の歴史や遺跡を求めて生まれ育つた土地を飛び出すような『ホビット』は、滅多にいない……というか、ラグアは百年近い人生の中で、彼以外見たことがなかつた。

したたかで、若干（？）性格が歪んでいても当たり前だと、無理矢理自分を納得させたラグアは、黙つて食事の準備を始める。

多少（？）性格に難があつても、作る飯が美味ければラグアに異存

はない。

「歴史ロマンを求めて旅をしたから、今、ボクは、ラグアさんの弟子になつてゐるんだと思いますけど……違いますかね？」

「いや、うん、そうだな」

「もしラグアさんが、この地底遺跡・千年王國を調べつゝして、次の遺跡を求めて旅をするって言つんなら、ボクも一緒に行きますよ。まだその時も弟子だつたらね」

「ああ」

ラグアは友との旅の果てにこの遺跡に辿り着き、ここに近くに居を構えた。遺跡について調べ、調査結果をまとめて学界に発表し、本を出版した。ナナイはその本を読んで歴史ロマンの虜になり、この地にやつてきたのだ。

それは、一生を故郷で過ごす『ホビット』にとつて、未だかつてない大冒険。若い頃、友と一緒に世界中を旅したラグアの冒険と大差ない。

短い返事をかえした後は、言葉少なに昼食に舌鼓を打つた。絶妙なバランスで作られたナナイ特製のベーグルサンドをゆつたりと味わい、フルーツケーキとしようが紅茶で疲れを癒す。

お茶をもう一杯お代わりする頃にはすっかりくつろいで、数少ない『ドワーフ』用ブーツを脱ぎ捨て、いつの間にか疲労で凝り固まつたふくらはぎを探みほぐしていると、ラグアとナナイしか居ないは

ずの静かな遺跡に、かすかな物音が聞こえた。

「……今、なんか聞こえたな？」

「町の人たち……が、来るわけないか。き…気のせいとか……うひ  
いつ」

捕らえた物音を氣のせいだと流そうとしたナナイは、あえなく失敗する。かすかでしかなかつた物音が、より明確に聞こえたからだ。

カツカツと規則正しい音と、カツーン、カツーンと、間が空いて不規則な音。その二つから推測される音の正体は、二人の人間の足音。

脱いだブーツを履き直したラグアは、護身用を兼ねた隠し扉（たまに罠）を壊すための大金槌を手に立ち上がった。ナナイは戦闘力が皆無なので、おとなしくラグアの背中に隠れる。

物音に耳をすませていると、不規則な足音に合わせているのか、規則正しい足音が時折止まっているのが分かつた。慣れない遺跡歩きにヨレヨレになつた観光者なら問題ないが、貴重な遺跡の宝を盗掘しに来た荒くれどもだつたら、いささか厄介である。

ラグアとナナイが居る場所は、『ドワーフ』の英雄王・ガレドアンクが建国した千年王国の王城、一階ホールの奥。どうやら使用人の部屋だつたらしいこの狭い室内では、当時の生活を窺わせる小物がいくつか発見された。

歴史的価値はプライスレスの代物だが、盗掘者たちが喜びそうな金

「一つの足音が少しずつ、だが確実に近付いている。大きく響いて聞こえるのは、侵入者が一階ホールまで辿りついたからだ。」  
「一つの足音が少しずつ、だが確実に近付いている。大きく響いて聞こえるのは、侵入者が一階ホールまで辿りついたからだ。」

ホールと名が付くその広間は、いわゆる王城の玄関ホールで、百人の客人（もちろん、『人間』、『エルフ』、『獣人』、『魔人』のような『ドワーフ』よりも大きい人たちでも！）が来ても余裕で迎えられる広さを誇る。まあもつとも、國が滅んだ今となつては、過去の榮華になんともいえない哀愁を感じる光景なわけだが、何も遮るものがないその空間では、当然、物音がよく響くわけだ。

「誰ですかね、ラグアさん」

足音と、自身の息遣いしか聞こえない緊張感に耐えられなくなつたらしいナナイが、不安そうにひそひそと囁く。

「さてな。会つてみないと分からん」

「それはそうですけど……」

「観光客や、オレらみたいに歴史ロマンを求めてきた奴らなりよし。それらを台無しにするようなならず者なり……」

「ならず者なら……？」

「こいつでガツンだ」

「……死んじゃいますよ、そんなもの大金槌おほときで殴つたら。よくて複雑骨折じゃないですか？」

「つまくやるわ」

「や、だから、つまくやつても複雑こつ」

突っ込み（ことば）が不自然に途切れた。

大地に根ざして生きる『ホビット』特有の明るい茶色の瞳がまん丸に見開かれ、この部屋唯一の出入口を見つめている。同じく、毛深い『ドワーフ』特有のもしゃもしゃの髪に埋もれるように隠れた小さな黒い瞳も、出入口……いや、そこに現れたあまりにも予想外な人物を映し出し、限界まで見開かれた。

「なんでこんなところに『ドワーフ』と『ホビット』がいるんだ？  
……私の見間違いか？」

「……い、いや……僕にも見えるから、見間違いでも、幽霊でもないよ」

美しい『エルフ』の女性と、疲労困憊といった感じで両膝に手を当てているアカツキ人らしき男性の二人組。

驚いたことに、ラグアはそのアカツキ人に見覚えがあった。『インスト』の顔は見分けがつけ難いが、さすがに共に冒険の旅に出た

友人”の顔を間違えるワケがない。

「刀祈……なのか？」

名前を呼んでから、それはオカシイと気付いた。

『人間』はこの世界に生存するどの人種よりも寿命が短い。百年生きられればいい方で、最高で百五十二歳まで生きたという者もいたが、それは例外中の例外だ。肉体のあらゆる箇所がアカツキ国の方々クリ仕立てになっていたというから、半分死んでいたと言つても過言ではないだろう。

ラグアが友人のアカツキ人・橘 刀祈と旅をしていたのは今から七十年ほど前。お互いが二十代だった頃だ。それに対して、目の前のアカツキ人の青年は二十代半ば。アカツキ人が若く見えることを念頭に置いて多く見積もつたとしても、三十代前半といった若さだ。

ラグアの友であるわけがない。

と、なると、「刀祈の息子か、孫になるのか?」という結論に至るわけだが、ようやく乱れていた呼吸が落ち着いた青年は、笑顔で応えた。

「ラグア。久しぶりだな。かれこれ七十年ぶりくらいか?」

「本人なのか?!また随分と”若作り”じゃないか、刀祈!」

「ちょ、ラグアさん?!若作りとかいうレベルじゃないですよっ?」

!」

ラグアの冒険の話は、今まで出版した書籍のあとがきにいくつか記したので、それを読んだことがあるナナイは、目の前のアカツキ人がどういった人物なのか見当がついたらしい。ラグアの返答に直ぐ様ツッコミを入れてくる。

「どうせ刀祈のことだ。とんでもないことをしでかして、不老長寿とかにでもなったんだろうや」

「さすがラグア！よく分かつたな！」

「全肯定か！適当に言つたのに！…」

「僕はただ、愛の証明をしただけだよ」

「隣の『エルフ』の嬢ちゃんにか？」

「そう。ラグア、僕の奥さんのセレファスだよ。セレファス、僕の友人、考古学者のラグア」

「私は嬢ちゃんではない

「おう、そいつは悪かつたな」

「……いや、分かつて貰えればそれでいい……」

不機嫌そうに返されたので、すぐに謝罪を口にすると、『エルフ』

の女はポカンとした。性格に難ありな『ドワーフ』がこんなにもあつさり謝るとは思わなかつたのだな。

『ドワーフ』は良くも悪くも誇り高い一族で、古い『ドワーフ』ほど粗野で頑固な者が多い。地下に文明を築き、身内で固まつて生活をしているので、価値観までもが凝り固まつてしまつ 例えその価値観が間違つていたとしても 。

ラグアも旅をする前はそつだつた。

自分の考えが正しいと信じて疑わず、他者の考えなどハナから聞こうともしなかつた。そのくせ何故自分の言ひことが通らないのかと腹を立てていたのだから、呆れる。

井の中の蛙そのものだつたラグアは、他者を気遣うことなく、ましてや、他者からの気遣いに気付くこともなく、旅の途中で刀祈に出来つまで、怒りっぽくて手の早い、實に『ドワーフ』らしい『ドワーフ』だった。変わり者の刀祈と一緒に旅をして、数々の困難を乗り越えていく内に、過去の自分を振り返つて”恥ずかしい”と思えるようになつたのだ。

今では彼も、（『ドワーフ』としては）”変わり者”の仲間入りだ。

「何やつたんだよ

「ちよつとドラゴンの血肉を食べてみたりしたんだよ

「ちよつと…！ そんなん言葉で済むことじやないですよー！」

「美味かつたか？」

「味！？気になるの……いや、味は大事ですね、はい」

混乱しているナナイはツッコミを入れることで安定をはかり、ラグアと刀祈が何か言う度にいちいちツッコミを入れていたが、『ホビット』を見るのが初めてだつたらしいセレファスに頭を撫でられ、それどころではなくなった。

内心はわはわだろうが、あまり騒ぐのも男の沾券に関わるとでも思ったのか、黙つて撫でられ、耐えることにしたようだ。

「美味かつたよ。意外にも鶏肉みたいな味だったから、タレつけて照り焼きにすれば良かつたなあつて思つたけどね」

「肉食獣なのに鶏みたいな味なのか。脂多そうなイメージなのにな」

「まあね。塩胡椒でも美味しかつたからいいんだけど。新鮮だつたから」

「新鮮さは何の味にも勝るからな……つて、ちょっと待て。ドラゴンを食つたのになんでそんなにひ弱なんだ？不老長寿以外に、頑丈さとか強さとかは加味されなかつたのか？」

ここに到着した時の疲労困憊つぶりを思い出し、疑問に思う。セレファスは平然としていたが『エルフ』の身体能力は心身共に優れている『竜人』たちに勝るとも劣らない。どれだけの距離を移動してきたかは分からないが、彼女の疲労度を基準にしてはいけないのだ。

「それが不思議なんだよねー。ドラゴンの血肉って、不老長寿だけじゃなくって、身体能力の底上げもあったはずなんだよね。書物にもそう書いてあつたし、情報通の商人に話を聞いてみても、そのはずだつて言つてたのに……」

「そつちは変わらずヘタレか」

「やかましいつ……これでも家でいろいろ試してみたんだよ？運動能力検査とかしても」

「変わらなかつたのか？」

「見事にね」

肩をすくめる様に嘘臭さはなく、ドラゴンの血肉の恩恵を隠している風ではない。刀祈の身体能力は、頭脳にばかり栄養がいったのではなくかと心配になるくらい『人間』の中でも最低ラインだから、そちらの恩恵がなかつたのが本当に残念だつたのだろう。笑みが苦い。

「…………」「食つたんだ？」

「え？……あ、尻尾の先から三十センチほどかな」

「また随分と末端を食つたんだなあ。お前、それ、タンスの角に足の小指を百回連續でぶつけたくらい痛かつたと思つぞ？」

「だらうね。僕がそこを斬り飛ばしたら、失神してた」

「可哀想に」

セレファースに未だに撫でられ続け、おとなしくしていたナナイが、「一人の会話に我慢出来ず、「ドコからツツコミ入れたらいいか分からぬ！」と突然叫んで美人エルフを驚かせているのを視界の端に捕えつつ、ラグアは刀祈の身に起きた奇妙な変化に思考を巡らせる。

「まあ、尻尾だから、当然、再生能力が活発になつたんだろうな」

「え。ドクロンの尻尾って、トカゲと一緒になの？！」

「ああ。確かにそうだつたはずだぞ。オレも長年ドラゴンを研究してゐる学者の著書を読んだことがあるが、それにそう書いてあつたのを記憶してゐる」

「なんか可愛いなあ」

「凶暴さは全然可愛くないけどな……尻尾の超再生能力一点のみが備わつたんなら、他の身体能力に恩恵はいかなかつたんだろうなあ……で、不老長寿だけなのか？」

「怪我とか病気とか疲労とかすぐに回復する、かな。痛いし、弱るし、疲れるんだけど、ちょっとしたら通常に戻るんだよね」

「ことじん再生にのみに恩恵がいつたんだな。身体能力上げたいんだつたら、地道にトレーニングしなきゃならんようだな。すぐ回復

するんだつたら鍛え放題なんじゃないか?」

「ナゾは楽にチートになりたかつたなあ」

またもや心底残念そうに苦笑する刀祈の腰の辺りを慰めるように軽く叩き（本当は肩を叩きたいが、『ドワーフ』の平均身長は『人間』の平均身長より大きく下回るから無理）、ラグアは一番始めにするべき質問をよじやく投げかけた。

「……で、なんでお前ら遺跡にいるんだ?」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0738ba/>

---

L i f e

2012年1月5日22時57分発行